

## 立志の人 — 山川健次郎 —

江戸時代の末、幕府軍と幕府をたおそうとする連合軍との間に戦いがあった。幕府側の会津藩（今の福島県）と薩摩藩（今の鹿児島県）、長州藩（今の山口県）を主とする連合軍との戦いである。幕府軍はやぶれ、新政府が誕生した。会津藩は降伏後、故郷の地をはなれ、青森県の下北半島にうつることになった。しかし、下北半島に移住した会津の人々は、開墾に失敗し、全国に散り散りとなってしまったのである。

会津の地に生まれた十五才の健次郎は、一人、家族とはなれ、敵であった長州の人の世話になっていた。会津の人々は、故郷を再建するためには次の世代にたくすしかないと考え、つてをたよって、敵であった藩の人に子弟の教育をいらしたのである。

健次郎は、学ぶ機会をあたえられたことに感謝しつつも、故郷を思う心は強く気持ちは複雑だった。会津の地をはなれ苦勞している人々を思うと、胸がつぶれる思いであった。

このころ、新政府によって、これからの国を背負う人材を育てるために、全国から留学生が集められた。健次郎もその一員として選ばれ、アメリカに留学することになった。健次郎十八才のときである。「これから、何を学ばいいのだろうか。」

健次郎はアメリカに向かう船の中でずっとなやみ続け、ねむれぬ日々が続いていた。

そんなある日、満天の星をながめながら広がる太平洋を見つめていると、この広い太平洋上で日本

行きの船に出会い、郵便物を受けわたすとの張り紙が出された。

「そんなことができるのか。」

健次郎は不思議に思いながらも、その瞬間を決して見逃すまいと思った。

暗闇の中、遠くの方にほのかな明かりが見えた。船の明かりだ。その船が次第に近づき、船体があらわれたとき、健次郎は鳥肌が立った。この広い太平洋上で、何と二せきの船がぴたりと出会ったのである。日本の技術では考えられないことであった。健次郎は、外国の技術の高さにおどろかされた。これからの日本には科学技術が必要であると実感した。

健次郎はアメリカに到着後、あえて日本人のいない町に住み、勉強にはげむことにした。名門エール大学のあるニューヘブンから東へ三十マイル（一マイルは約一・六キロ）にニューロンドンの町があり、さらに北十マイルのところにノールウィッチの町が



あった。田園の広がる人口一万人の田舎町で、健次郎は中学校に入学した。

「会津のため、日本のために学ばなければならない。」

健次郎は、大学に入学し、学問を修めて帰国することを心にちかった。しかし、英語が理解できず、苦しい日々が続いた。だれもたよらず、不眠不休で勉強した。すると、半年も過ぎると日常の会話に不自由しなくなった。

科学の基礎は物理学であるとのハチソン校長のすすめで、健次郎は物理学を志した。校長自ら個人指導を買って出て、健次郎を支え続けた。その結果、健次郎は、エール大学附属のシェフィールド理学校に合格した。日本人初の合格だった。

留学生の中には、留学しても勉強についていけず、遊びに明け暮れる者もいた。政府は、品行不良の留学生を帰国させることにした。だが、アメリカ全土にいるすべての留学生を調査することは困難であった。そこで、成績に関係なく帰国させるという乱暴な結論を出した。しかし、成績がよく勉強費を工面できる者は留学を続けることができた。まじめに勉強にはげむ者が留学を続けるためには、勉強費を自分で用意しなければならない。健次郎には費用を工面する当てなどなかった。しかし、学業半ばで帰国するわけにはいかなかった。健次郎は、あと一年半でエール大学を卒業できるはずだった。健次郎はなやんだ末、クラスメートに苦しい胸の内を話した。すると、

「オーケー。お金のことは心配しないでください。ただし、条件があります。学業を終えて帰国した

ならば、心をこめて国のためにつくすことをちかうのです。」

同級生のおばにあたるハンドマン夫人が、援助を申し出た。

「自分は日本のためにつくすつもりです。決して、うそいつわりはありません。」

と、健次郎が力強く答えると、夫人は、健次郎の手を固くにぎった。

健次郎はまたしても幸運にめぐまれた。そして、四年半におよぶアメリカ留学を終え、大学を卒業することができた。

「ケンジロウ、おめでとう。」

だれよりも喜んでくれたのは、ハンドマン夫人であった。

日本の土をふんだ健次郎は、二十二才の青年になっていた。翌年から、健次郎は東京開成学校（後の東京帝国大学・現在の東京大学）の物理学教授として活躍した。講義を英語で行い、最新の論文を



山川健次郎

読んで聞かせ、必ずそれを実験した。また、人を育てることも力をつく

した。著名な物理学者である田中館愛橘、長岡半太郎を育てた。その後ノー

ベル賞を受賞した湯川秀樹、朝永振一郎はその流れをくむ物理学者である。

健次郎はその後多くの大学にまねかれ、日本の物理学の基礎を作った。

数多くの後輩や学生に愛され、明治から大正の日本を支える人づくりに生涯をささげた。